

崇城大学未来情報コース異分野イノベーション

北区サブコース受講学生による

北区こどもまつり報告書

～地域企業と連携した地元中学生によるイベント運営プロジェクト～

2024年2月11日

崇城大学情報学部情報学科北区子ども班

崇城大学IoT・AIセンター

目次

概要について	1
報告書（詳細版）	2
1. はじめに	2
2. 背景	2
3. 提案	3
4. 見込まれる効果	3
5. 先行事例	4
6. サーバント	4
7. イベント内容と評価	6
8. 考察	8
9. むすびと残された課題	9
10. 謝辞	9
11. 参考文献	10
12. 付録	10

概要について

《目的》

北区のまちづくりビジョンである「ず〜っと住みたいわがまち北区」の実現に向けた北区の子どもたちの育成。特に中学生を中心とした次世代育成。

《主催・協力》

- 主催:崇城大学情報学部情報学科北区子ども班／五霊中学校学芸部
- 協力:株式会社リバテープ製菓／北区役所

《イベント概要》

- 日時:2023/11/11(土)
- 会場:植木中央公園運動施設
- 内容:株式会社リバテープ製菓提供の製造廃棄物(絆創膏)を使った、五霊中学校学芸部によるオリジナルエコバッグの製作
- 予算:5万円
- イベント参加人数:120名
- 主催側人数:23名
- 準備期間:4ヵ月
- 広報:FMラジオ放送
- 評価結果:約40人からアンケート取得(詳細後述)



イベント終了後の意見交換会の様子

報告書（詳細版）

1. はじめに

我々崇城大学情報学部未来情報コースでは、熊本市北区、崇城大学 IoT・AI センター、SCB ラボとの包括的連携協定に基づき、講義の中で熊本市北区の地域活性化について検討し、課題解決の活動を行っている。そのなかで、北区で地域交流の機会が減少していることを知ったことから、「北区こどもまつり」を通して地域交流を行い、同時に中学生を中心とした次世代育成など、熊本市北区が目指しているまちづくりビジョン「ず〜っと住みたいわがまち北区」を実現につなげる取り組みを企画した。

2. 背景

近年、熊本市では、図 1 に示すように、地域内の子供やその保護者と地域住民や地元企業との交流が薄れてきており[1]、子供たちの地元のイベントへの参加率の減少など、地域全体で子供を育てていく環境が失われつつある。地域交流が減少している主な要因として、個人主義の浸透、子どもたちが近所の人々や地元企業と親交を深められる機会の不足などが挙げられている[2]。我々は地域交流が薄れることで、若者が地域や地元企業の魅力を発見できないまま成長することが、若者の県外流出原因の一つだと考えた。この県外流出によって人口が減少し、担い手が減ることで産業が衰退し、ひいては北区の経済疲弊につながっているという危惧を抱いた。

国勢調査によると、2015 年から 2020 年までの 5 年間で男性、女性ともに若年層での顕著な減少を特徴として、およそ 3300 人の北区の人口減少が示されている[3]。

本市では、少子・高齢社会の一層の進行や人口減少、核家族化などにより、人と人とのつながりが希薄化し、近隣住民で支えあう互助の機能が脆弱化しています。また、介護や子育てをめぐる問題や深刻化する高齢者・児童虐待問題、ひきこもりや社会的孤立の問題など、生活・福祉課題が顕在化しています。



このような中、地域福祉の中核的な役割を担う社会福祉協議会では、校区の社会福祉協議会や自治会、民生委員・児童委員など、地域の皆様方と連携・協働を図りながら、誰もが健やかで安心して暮らせる地域づくりをめざして活動を展開してまいりました。

今回の第 3 次計画では、アンケート調査や住民座談会を行い、地域住民の皆様方が直面している生活課題を掘り起こし、その解決策を住民の皆様方とともに考え、ともに行動するための方向性について示しております。この計画をもとに、更なる住民の皆様方の参画と協働による地域福祉活動の推進を図り、人と人とのつながり、支えあう環境づくりをすすめるとともに、支援が必要な方へ適切な対応ができる体制づくりをめざしていきます。

最後になりますが、本計画策定にあたり、ご協力いただきました関係者・市民の皆様方から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

熊本市社会福祉協議会会長 瀬谷 愛一

図 1 第 3 次熊本市地域福祉計画・熊本市地域福祉活動計画[1]

3. 提案

このような背景を踏まえて、私たちは子どもと地域住民や地元企業との交流の機会を増やすことが若者の県外流出による人口減少を解決できるカギになると考えた。そこで地域のイベントに地元企業とその地域の中学生が運営として参加する仕組みをつくる案を考えた。この取り組みにより、地元企業やイベントに参加する地域住民と中学生との間で交流が生まれ、地域活性化や次世代の地域の担い手育成の促進が期待できる。

私たちが熊本市北区で実験的にこの取り組みを行い、活動を形成することで、各地域でその取り組みを行えるような共通基盤となるプラットフォームを構築していきたいと考える。

4. 見込まれる効果

この多世代間や地域企業との交流活動を行うことによる、中学生にとっての見込まれる効果について記述する。

- ・ イベントを通じて地域と触れ合うことで、地域の資源に対する理解が進む。
 - ・ 主体的に考える力が身に付くことで、文部科学省が推進している育成すべき資質・能力の三つの柱の習得につなげることができる[4] (図2)。
 - ・ 企業との関わりを持つことで、将来働く仕事について具体的に知ることができる。
- これらのように、将来の役に立つ力を身に着けることができるといった効果がある。

加えて、このような交流活動は、子どもたちの将来の自信にもつながるという効果が研究から示されている。具体的には、子ども時代に「親や学校の先生以外の大人と話すことがあった」、「地域の行事に参加することがあった」若者ほど、普段の仕事における

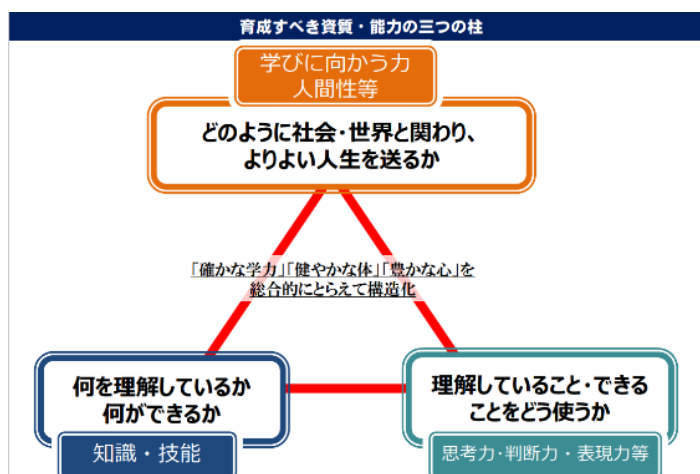


図2 文部科学省 新しい学習指導要領の考え方

—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ— [4]

態度や自信を持っているとの研究結果[5]が文部科学省から示されており、この効果は幼少期から地域のイベントに参加して地域の大人と関わり、さまざまな体験をすることで地域の魅力を発見したり、将来的な自信につながったりするなど、「ず〜っと住みたいわがまち北区」というまちづくりビジョンの実現につなげることができると思う。

次に、地域に対しての効果について述べる。

- ・地域のつながりが生まれ、ファンが増える。そうすることで、地域活性化につながり、将来の担い手が増える。
 - ・地元の中学生にその地域の企業を知ってもらうことで、将来的に企業の人手不足改善につながる。
 - ・地域の課題を地域で解決できるまちへと成長する。
 - ・企業 PR
 - ・地域貢献による社会的信頼性の向上
 - ・イノベーションの創発
- 上記のような効果が見込まれる。

5. 先行事例

ここで、先行事例について言及する。子どもをお客様として迎え、さまざまな体験をさせる地域交流イベントは全国で多数開催されている。一例として、福岡県のフクツ・シティ・クリエイターズが主催する「ふくつこどもまつり[6]」や、熊本県の株式会社和城建設が主催する「こどもまつり[7]」が挙げられる。これらは子どもたちが地域住民と交流できるという仕組みを取り入れたイベントとなっている。

これらの先行事例に共通した問題としてイベントの開催に必要なコストが多大であることが挙げられる。例えば、文献[7]のこどもまつりにおいては、決算報告書上、約152万円が支出超過となり、株式会社和城建設が負担したことが示されている。また、今回我々が参加した北区こどもまつりでは、多くの区役所職員や関係団体の方々が従事しており、労務面でのコストが将来的に問題となる可能性が感じられた。

6. サーバント

そこで我々はコスト面を改善し、北区こどもまつりの持続性を向上させるために2011年に星合隆成教授が提唱した地域コミュニティブランド(Social Community Brand: SCB)という理論[8]を用いることとした。特にサービス利用者がサービス提供者の役割を担うサーバントという機能を用いた。これは北区こどもまつりへの参加者としてふるまうことが一般的であった中学生(サービス利用者)を、サービス提供者とし

て北区こどもまつりのイベントを運営する役割を担わせる仕組みである。

ここで、図を用いて中学生のイベントへの参加形態について説明する。

図3は、従来型の参加モデルである。このモデルでは、サービスの提供を行うサービス提供者とサービスを利用するサービス利用者が明確に分かれたモデルである。サービス提供者はサービス利用者のために、資金や人材を前もって集め、利用者が必要とするときに提供する。ときに準備する資金が多額となったり人材が多すぎたにもかかわらず、準備に見合った需要がなかったりした場合などにサービスの維持が困難になるといった問題がある。そのため SCB 理論では、サービス利用者がときにサービス提供者となることで、準備する資金や人材を減少させ、サービスの維持を図ることができるサーバントという機能を提唱している。

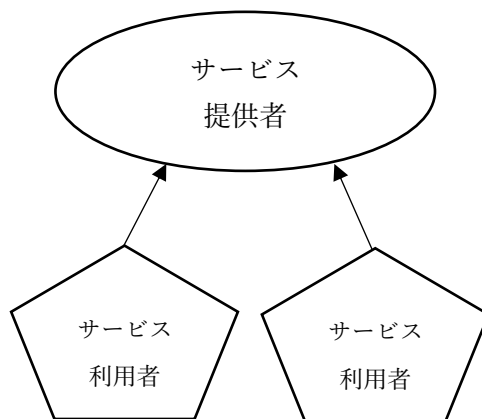


図3 従来型（サービス提供者とサービス利用者が分かれたモデル：
クライアントサーバモデル）

図4にサーバントを用いたイベントなどへの参加モデルを示す。図に示されるように、サービス提供者が存在しなくても、サービス利用者がサービス提供者の役割を担うことでサービスの維持が可能となる。

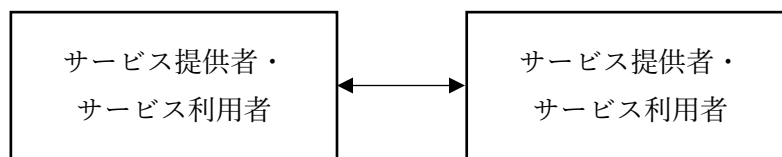


図4 今回のこどもまつりにおける中学生の参加モデル（サーバント）

次に、今回の北区こどもまつりでは、これまでまつりに参加していたサービス利用者である中学生をサーバントの機能でサービス提供者としたところに特徴がある。

図5は、中学生がサービス利用者の役割のみを担って北区こどもまつりに参加した

場合のモデルである。この場合、サービスつまりエコバッグづくりのブースを運営するためには、区役所職員がお客の順番の整理などの客管理、エコバッグの作り方の指導、はさみを使用したケガなどの事故が起きないように監視と安全管理、周囲から客を呼び込む広報といった業務を行うこととなり、人材を確保するためのコストが必要となる。

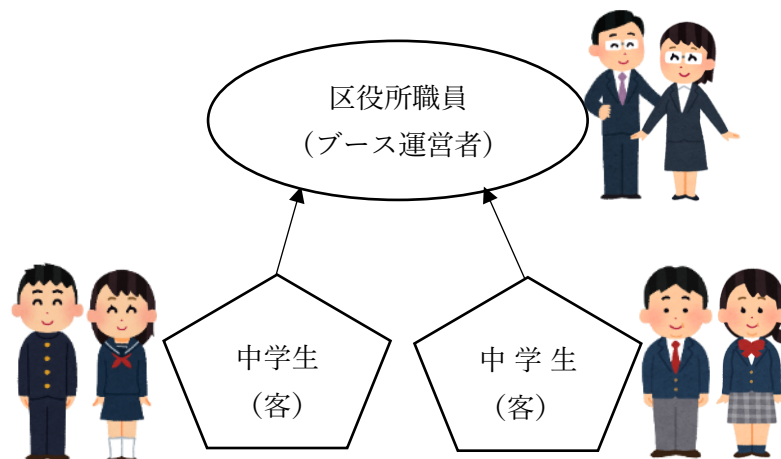


図5 中央集権的な中学生の参加モデル

図6に示す我々が提案するサーバントを用いた参加モデルでは、中学生がときにサービス提供者となり、またときにサービス利用者となるモデルであるため、中央集権的な区役所職員といったサービス提供者の存在を前提としなくても、エコバッグづくりを楽しみながら地域と交流する中学生のつながりを低コスト化することでブースを持続化することが可能である。

加えて、中学生がブース運営者という責任ある立場を経験することを通じて、見込まれる効果である「地域に対する理解が進む」「主体的に考える力を身に付け、社会と関わり、社会を理解し、理解したことを活用した取り組みを推進」「企業との関わりから将来の仕事についての理解促進」「将来的に社会人としての自信醸成」が実現される。

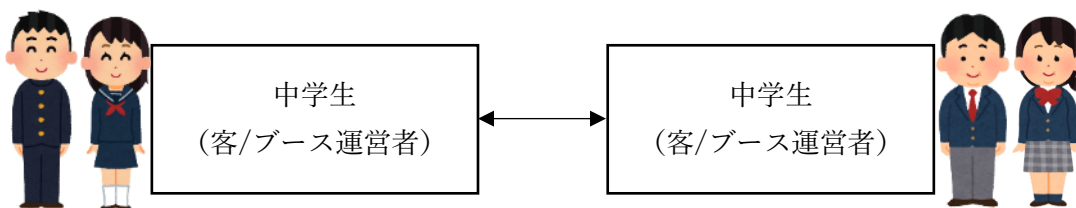


図6 サーバントを用いた中学生の参加モデル

7. イベント内容と評価

今回、北区こどもまつりに我々が参加し、先行事例に不足していたコスト面でのメリットをサーバントによって実現することを目的として、中学生が主体となってブースを



図7 エコバッグ製作の様子

企画・運営する新しい形でのイベントを行った。

具体的には、地元企業が製造する絆創膏のうち、品質検査で除外された廃材を利活用し、中学生がお客様として参加する子どもや中学生、地域住民の方々にお兄さん・お姉さん役としてエコバッグ製作のやり方を教えるイベントを行った（図7・図8）。

今回は、五霊中学校学芸部様と株式会社リバテープ製薬様に協力いただき、株式会社リバテープ製薬様から提供された絆創膏の廃材をデザインとして使用したオリジナルエコバッグの製作ブースを設けた（図9）。

来場者数は120名で、非常に多くのお客様に楽しんでいただくことができた。

また、お客様に対して、「この活動に運営として参加してみたいか」、「この活動を誰かに教えたいか」というアンケート調査を行った（図10）。ところ、どちらの項目も



図8 完成したエコバッグ



図9 五霊中学校とリバテープ製薬を示すポスターパネル

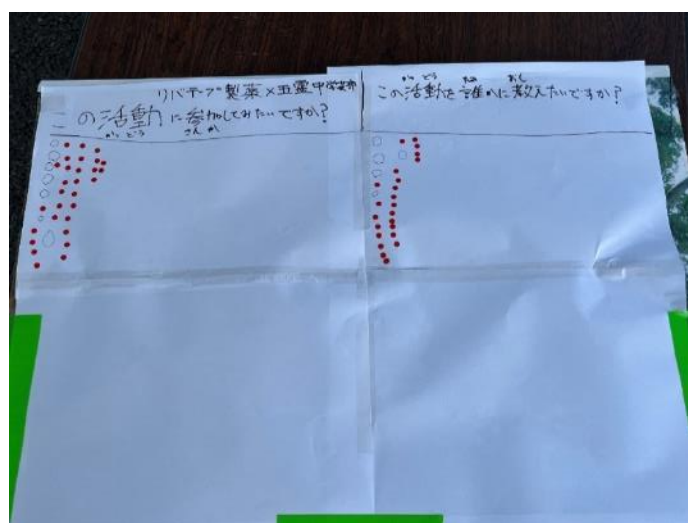


図10 アンケートへの回答の様子

40名程度から賛同をいただき、五霊中学校学芸部様からも「来年も参加したい」との有難いお言葉をいただきました。

また、今回協力していただいた株式会社リバテープ製薬様についても、参加して頂いたお客様の大半は幼少層だったため、「よく知らない」という意見が多々寄せられたが、本イベントの参加によって、どのような企業なのかを少しでも知っていただくことができた。さらにお客様同士での新しい交流や、高齢者と子どもの世代間交流が見られるなど、地域活性化としての効果を感じられた。

8. 考察

本イベントを通して、地域の魅力や地域活性化に向けた子どもたちの可能性をより一層感じることができた。これらを地域全体に実感してもらい、他地域に住んでいる人が最終的に地元に戻るのと同時に「住んでいてよかった」と感じてもらえるような地域の在り方が、北区の目指している「ず〜っと住みたいわがまち北区」のビジョンの実現に当てはまるのではないかと考えた。

また、今年度の北区こどもまつりでは、五霊中学校学芸部様とリバテープ製薬様とが活動に参加してくださったことで地域資源間の連携のきっかけができた。地域においては、エコバッグづくりのほかにも、少子高齢化や地域経済の疲弊を原因とする様々な地域課題が存在する。これらの地域課題を低コストに解決するためのプラットフォームを、地域資源同士をつなげることで低コストに構築することが求められている。このプラットフォームの実現に向けて、北区こどもまつりに参加する中学校や企業の増加を目指して、下記のような取り組みを提案していきたいと考えている。

- (1) 中学生が保有するタブレットを用いた今回のイベントの成功実績の周知。
- (2) (1)のタブレットを利用した、中学生によるリバテープ製薬様をはじめとする地域企業の取り組みの紹介。
- (3) 北区こどもまつりに集結した中学生と地元企業のつながり方を、セミピュアモデル[8]を用いることでトラストの向上や新結合創発を実現（図 11）。
- (4) SCB 理論を用いた低コストで持続的な連携方法を中学生や地元企業に紹介。

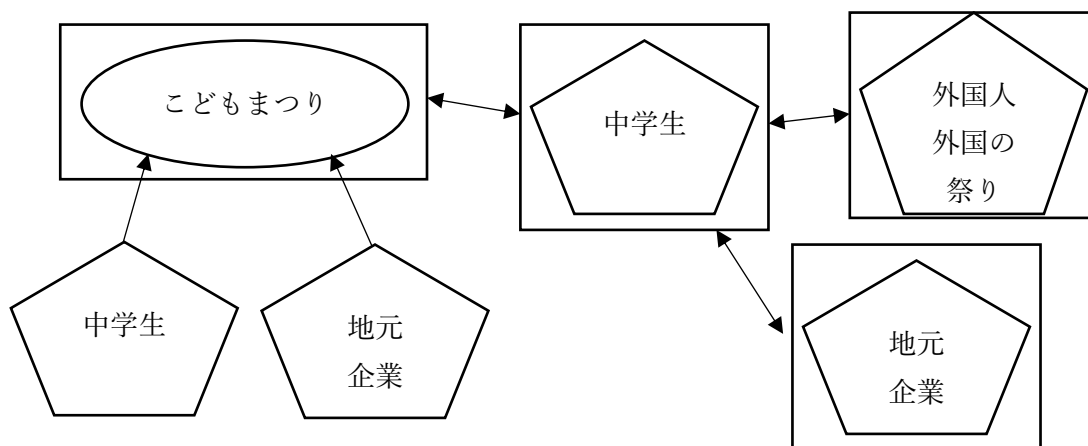


図 11 セミピュアモデルを用いた北区こどもまつりの参加及び発展モデルの例

9. むすびと残された課題

本イベントを通して、改めて地域交流が重要であるとともに、交流を低コストで持続的に実現させるための仕組みが重要であることを再確認した。また、今回は我々崇城大学生をはじめ、中学生、地域企業にとって廃材を活用したワークショップというユニークな取り組みであったため、多くの参加者に楽しんでいただけた。

一方で、今後の北区こどもまつりに参加する中学生や企業の発掘が残された課題となる。廃材のようなユニークな資源を保有する企業や、イベントへの参加を希望する新たな中学校は、アンケートの結果から潜在的に存在することが推察できるものの、現在のところは見つかっていない。考察で述べたような参加中学校や企業の増加を目指す取り組みを進めていくことが重要だと考える。

10. 謝辞

本イベント(北区こどもまつり)の実施にあたり、終始適切なお助言とご指導をいただきました熊本北区役所職員の泉満博様、柳田遼太郎様、井上龍子様、並びに北区役所職員の方々に深く感謝申し上げます。また、本イベントのブース運営にご協力いた

いただいた五霊中学校学芸部の皆様、顧問の上田恵美子先生に深くお礼申し上げます。加えて、本イベントのブース運営にあたり必要な材料のご提供をいただいた株式会社リバテープ製薬様に心よりお礼申し上げます。さらに、イベント広報の機会を与えてくださった水野直樹様、高智穂さくら様に感謝申し上げます。最後に、多くの的確なご指導をくださいました崇城大学情報学部情報学科の星合隆成教授並びに内藤豊助教に心より感謝の意を表し、謝辞を結びます。

11. 参考文献

- [1] 熊本市, 第3次熊本市地域福祉計画・熊本市地域福祉活動計画, https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=8962&sub_id=1&flid=59626 最終アクセス 2024/02/05
- [2] 文部科学省, 地域の教育力に関する実態調査, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/_icsFiles/afieldfile/2014/06/20/1265399_001.pdf 最終アクセス 2024/02/05
- [3] 日本医師会, 地域医療情報システム, <https://jmap.jp/cities/detail/city/43105> 最終アクセス 2024/02/05
- [4] 文部科学省, 新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そして実施へー, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf 最終アクセス 2024/02/08
- [5] Benesse 研究所, 若者の仕事生活実態調査報告書, 第3節仕事における態度・能力と子ども時代の体験, https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/wakamono/2006/pdf/wakamono_data06.pdf 最終アクセス 2024/02/05
- [6] 宗像経済新聞, 職業体験イベント「ふくつこどもまつり」 子どもたちが成長できる場を, <https://munakata.keizai.biz/headline/147/> 最終アクセス 2024/02/05
- [7] 株式会社和城建設, 第1回こども祭りを開催しました, <https://www.washiro.net/volunteer-report/2376> 最終アクセス 2024/02/05
- [8] 星合隆成, つながりを科学する 地域コミュニティブランド, 木楽舎, 2018.

12. 付録


2024年1月28日熊本市北区PTA連絡会/NPO法人熊本教育振興会主催「北区PTA連絡会定期研修会」にて取り組み内容発表



発表の様子



地域の現状



現状

年々、熊本では地域内の子供やその保護者と地域住民との交流が薄れてきており、子供たちの地元のイベントへの参加率が減るなど、**地域で子供を育てていく環境が失われつつある。**

今年度の活動


- ・ふれあいフェスタinほくぶEスポーツ体験
- ・北区こどもまつりエコバッグ製作

目標

- ・世代間交流
- ・こどもたちにより多くの地元企業を知ってもらう

↓


次世代の地域の担い手を育てる



北区こどもまつり

五霊中学校学芸部の生徒と一緒に北区こどもまつりにてオリジナルエコバッグ製作を実施

協力：熊本市北区
五霊中学校
リバテープ製菓




北区こどもまつりを通して

良かった点

- ・自律的に行動できていた
- ・助け合いができていた
- ・地域内の新しいつながりのきっかけができた

反省点

- ・高齢者の方にはあまり参加してもらえず、私たちの目標である地域内の世代間交流は果たすことができなかった。
- ・役割分担が曖昧だった。
- ・中学生は想像以上に考え方や振る舞いが大人びており、もっと他にも出来ることがたくさんありそうに感じた。



発表スライド